

一次の各問に答えなさい。

問一 次の①～⑤の傍線部を漢字で正確に答えなさい。

- ① 立候補者のトウロン会に参加する。
- ② 社会に流布するメイシンに振り回される。
- ③ その案は議会でショウニンされた。
- ④ 手アツイ看護を受ける。
- ⑤ 学級委員長をツトめる。

問二 次の①～④の傍線部の漢字の読みをひらがなで正確に答えなさい。

- ① 食文化の本を著す。
- ② 小さな食料品店を営む。
- ③ 書類を無造作に置く。
- ④ 怒りで形相が変わる。

問三 次の①～③のことわざの空欄に入る漢字一字を答えなさい。

- ① 雨だれ【 】をうがつ … わずかなことでも、それがたび重なると大事になる。
- ② 【 】は藍あゐより出でて藍より【 】し … 弟子が師よりもすぐれている。
- ③ 魚心あれば【 】心 … 相手が好意を示せば、自分も好意をもって応対する気になる。

問四 次の①～③の空欄に入る最も適切な語を〈選択肢〉より選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上選ばないこと。

- ① 【 】出かけたとしても、もう出発に間に合わないだろう。
- ② 姉はやつと顔を上げ、【 】語り始めた。
- ③ 両国の関係が悪化したため、領土問題の解決は【 】難しくなった。

〈選択肢〉

ア、決して イ、おもむろに ウ、たとえば エ、つねに オ、きわめて

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 各 問 に 答 え な さ い 。 (な お 、 出 題 の 都 合 上 、 本 文 を 省 略 し た 所 が あ る)

私は商店街で育ったまったくふつうの子でもでした。小学生の頃から店を手伝っていたので、自分の家にどのくらいお金があつて、両親が世間からどんな風に見られているかということも、何となくわかつていたような気がします。

私が子ども時代を過ごした昭和三〇年代は、何よりも暮らしが一番でした。一に暮らし、二に暮らし、三に暮らし、暮らしがいちばん偉い時代でした。子どもであっても勉強より遊びより暮らし優先で、暮らしのために店を手伝うのは当たり前のことでした。それは一人私だけでなく、商店街の子どもは皆そうだったのです。家業という言葉があるように、家の中にそれぞれ自分の役割がありました。

こんなふうによく、私はいい子の代表に見えるかもしれませんが、決していい子ではありませんでした。家業が乾物屋という地味なくすんだ商売だったので、その反動で学校では受けない、笑わせたい思いが人一倍強かったような気がします。

当時大人気だった脱線トリオの由利徹の、腰をカクカク落とした歩き方を真似したり、雷門助六のあやつり人形を真似して見せたり、その合間にはダジャレばかり言っていました。シャレ帳というノートを作って、そのノートに「井の頭公園にいていーのかしら」とか、「ゴジラくんゴジラへどうぞ」とか、毎日欠かさずダジャレを書き込みました。思えば、私が生まれて初めて言葉と自覚的に向き合ったのが、このダジャレだったのです。

(中略)

さて、中学に入るとさすがにダジャレではクラスの笑いが取れなくなり、私の【I】はいつの間にか机の抽出にしまわれっぱなしになっていきます。その代わりに始まったのが詩です。今でも詩を書くきっかけとなった出来事をはっきり覚えていきます。中学二年のときでした。

新しく担任になられた志村嘉伸先生が私に、「ねじめは将来詩人になれるぞ」とおっしゃったのです。私はプロ野球選手になるのが夢でしたから、先生に「詩人になれるぞ」と言われてもちんぷんかんぷんです。それどころか詩人が一瞬死人に聞こえて、先生に「将来死人になれるぞ」と言われた気がして、この先生、いったい何を考えているのだろうと薄気味悪くなったほどです。

私に「将来詩人になれる」とおっしゃった志村先生は、私が班ノートに書きつけた詩が面白かったのです。ねじめは成績は悪いし、野球は大好きでまあ上手いがプロになれるというほどでもないし、まあ詩人にならないと思われたのでしょうか。私に詩人というものの実体がわかってきたのは、父親から詩人とはいかなる者かを教えてもらってからです。

志村先生が褒めてくれた詩のタイトルは「店番」です。当時、私の家である乾物屋には住み込みの店員さんが二人いました。中学を出て地方からうち就職した二〇歳前後の若い人たちです。その二人に混じって中学生の私も店番をしていました。店番するときはグレーの店服を着ま

した。私も店番するときは店服を着なければなりません。乾物屋は服にニオイが付くうえに意外に汚れる仕事なので店服を着た方が便利です。両親の気持ちとして住み込み店員さんに対して私を特別扱いしないという意味もあったのだと思います。私はグレーのその店服を着るのがイヤでイヤで仕方がなかったのです。店がくすんでいる上に店服までくすんだグレーなのです。④から、気持ちはどんどん沈んでいきます。そんな気持ちを、私は四行の詩に書きました。

店服を着ると

子どもでもない

大人でもない

宙ぶらりんの自分

「子どもでもない」というのは、中学生(中学生は世間的にはまだ【A】ですよ)なのに【B】並みに店服を着せられるということ。【C】でもない」というのは、店服を着ているのに中身は中学生だということです。私は店服を着ると【D】ではなくなり、かといって【E】でもなくなつて、宙ぶりにされたような中途半端な気持ちになって自分の居所がつかみかねてしまうのです。

今思えばぜんぜん大した四行ではありませんが、中学生だった私はこの四行を書いたとき、店番がイヤでイライラした気持ちがスッと落ち着く感じがしました。店番に対するイヤな思いが減つたような気分でした。【F】と書いたことで、逆に【G】でなくなった気がしました。

「詩人になれるぞ」のあとで、志村先生は「正確だ」と言つてこの四行を褒めてくれました。ねじめの気持ちが正確に書けている、ということです。先生その言葉を聞いて、わたしは「あ、そうか」と思いました。当時の私は「あ、そうか」と納得しただけで、それを説明することはできませんでした。

でも今なら説明できます。私は自分の気持ちを表す正確な言葉を見つけたので、イライラした気持ちがスッと落ち着いたのです。イヤな思いが減つたのです。【H】でなくなつたのです。詩を書くことは正確な言葉を見つけることなのです。

ここで言葉の正確さについても少し考えてみましょう。「店番」の詩で、私が「店番がイヤだ」と書いたらどうだったでしょうか。「店服を着たくない」と書いたらどうだったでしょうか。そういう感情はたしかに私の中にありましたが、しかし、店番はイヤでありながら一方で暮らしてました。一番大切な暮らしでした。店服は着たくなかったけれど、しかし、着ることによって私の暮らしは成り立っていました。だから「店番がイヤだ」と書いても、「店服を着たくない」と書いても、私の気持ちの片方しか表せていないことになります。それではダメなのです。正

確ではないのです。

正確であるということは、本質のまわりをぐるぐる回ることではなく、本質をぎゅつと驚擱^{わしづ}みにするということです。「店番がイヤだ」や「店服を着たくない」は自分が思ったこと感じたことを正直に書いてはいるけれど、それはただ正直なだけであって、正確ではないのです。言葉による表現を始めたばかりの人は、正直な言葉と正確な言葉を混同しがちです。たかぶった気持ちをたかぶった言葉で書いたり、悲しい気持ちを悲しい言葉で書くことが正確だと思ってしまうのです。でも、本当にそうでしょうか。人間ってそんなに単純でしょうか。

(ねじめ正一「ぼくらの言葉塾」より)

〔注〕

※1 脱線トリオ……昭和三十年代に活躍したお笑いユニット。

問一 傍線部①「家の中にそれぞれ自分の役割がありました」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、商店街の子どもは貧しさから抜け出すため、仕事を手伝わないと生活ができなかったということ。
- イ、子どもであっても、暮らし優先であり、家族の一員として手伝うことは自然であったということ。
- ウ、うちにどれほどお金があるかわかっているので、子どもであっても、手伝いはしたということ。
- エ、世間がどんなふうに分たち家族を見ているかということが、何となくわかっていたということ。

問二 傍線部②「言葉と自覚的に向き合った」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分にはすばらしい言葉のセンスがあるのだと意識するようになること。
- イ、自分の言葉づかいについて、日々、反省と改善を重ねるようになること。
- ウ、自分の言葉をノートなどに書いてみて、考えを整理するようになること。
- エ、どんな言葉をつかって表現するかを、自分でよく考えるようになること。

問三 空欄【 I 】に入る語として適切なものを、本文中から抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③「住み込み店員さんに対して私を特別扱いしないという意味」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、店主の息子だから店服を着ないでよいとすること、店員が不公平に感じるのを、避けようとしたということ。
- イ、店員であれ店主の息子であれ、お客さんから見たときに公平に見られるよう、十分に配慮したということ。
- ウ、店員と同じように公平に扱うことで、息子がしっかりと意識を持って働くように気をつかったということ。
- エ、店員と店主の息子では立場が違うということを店員がきちんと意識できるよう、外見は同じにしたということ。

問五 傍線部④「店がくすんでいる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、人目を引く華やかさが無い。 イ、建物が古びていて汚らしい。
- ウ、お客さんが来なくて陰気だ。 エ、若者とは無縁で活気がない。

問六 空欄 A H に入れるのに最も適切な語をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。ただし同じものを何度選んでもよいこととする。

- ア、店番 イ、店服 ウ、子ども エ、大人 オ、宙ぶらりん

問七 傍線部⑤「それ」とは何を指しているのか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、当時中学生だった私が店番をイヤだと思っていた本当の理由。
- イ、詩を書いたら店番に対するイヤな思いが減ったこと理由。
- ウ、「気持ち」が正確に書けている」と先生が褒めたことの意味。
- エ、先生が「将来詩人になれるぞ」と言ってくれたことの意味。

問八 傍線部⑥「ただ正直なだけであって、正確ではない」とあるが、これと同じことを表している部分を、この傍線部より前の本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問九 傍線部⑦「人間ってそんなに単純でしょうか」とあることから、筆者が人間の気持ちはもっと複雑なものであると考えていることがわかる。その複雑さについて、中学時代の筆者の「店番」についての気持ちを例にして、四十文字以上五十文字以内（句読点等も字数にふくむ）で説明しなさい。ただし、「役割」という語を必ず入れて説明することとする。

三 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

戦後間もない昭和二十年代半ば。ミツエが住んでいる東京の郊外では町村合併があり、それに伴って校区が変更されて、ミツエたち元「町の小学校」(「モト町の小学校」)の児童の一部は、元「村の小学校」(「モト村の小学校」)の児童と一緒に、新設された小学校に通うことになった。春から始まった新しい学校での、小学三年生、一学期の終わりのできごとである。

体操の時間は斉木先生が六年生の教室に行き、六年担任の橋本先生が三年生の体操の授業をする。君塚照子や大山澄子たち四人は、いつも早く着がえて、橋本先生を迎えに行くのだ。橋本先生は、モト村の小学校の先生だった。

体操の時間なんてなければいいのに、と思いつながらミツエは、のろのろとブルマーに着がえ、関のぼるたちと校庭に出た。

「あの子たちが、何であんなに早く着がえられるのか、わかった。体操のある日は、スカートの下にブルマーをはいてくるんだ」

「頭いい！ おれもそうしようかな」

「橋本先生、遅えなあ」

女子たちは、おしゃべりしたり笑ったりしながら先生を待っているが、ミツエは、一番苦手な体操の時間が橋本先生だなんて、と【I】^①のような気持で黙り込んでいた。

校舎の大きい方の玄関から、白い野球帽をかぶって白い体操ズボンをはいた橋本先生が、君塚照子たち四人と一緒に出てくるのが見えた。照子は先生の腕に自分の腕をからませている。うしろから、背の高い二谷カヨ子と、なんだかいつも風邪をひいているような根本千代と、ミツエの隣の席の大山澄子がついてくる。照子が先生に甘えるような仕草をして、先生は腕を力瘤自慢の形にした。照子の足が地面から離れ、照子は先生の腕にぶらさがった。すぐに先生は腕を下げ、照子の足は地面に着いたが、照子はそのまま腕をからませている。みんなが見ているのに、なぜ先生は腕を振りほどこかないのだろう。ミツエは見ているのが恥ずかしいような気がして、校舎の方に眼をそらした。

「集合ーっ」

と大きな声で言った先生の方にミツエが眼を戻したとき、腕をからませたままの照子はまだ一度ぶらさがるように、びよんと跳び上がった。先生の肩が傾いて、照子の膝が変なふうに曲り、一瞬、先生の脚を照子の脚が挟むような形になった。ミツエは【II】のような気がした。君塚照子はみんなに見せるためにしてるんだ、「橋本先生は【A】の先生だった、【B】は、【C】よりずっと前から先生と【D】だった」と言ってるみたいだ、とミツエは思った。

「今日は鉄棒をやる」

と橋本先生が言ったので、やっぱり【E】、とミツエは思った。

準備体操のあと、ブランコより校舎寄りにある鉄棒のところへ行った。鉄棒は、中高低二本ずつ一続きのものと、六年生でも跳び上がらなければつかめない高さの独立したものが一本あった。男子のあとに女子で、背の順に一人ずつ鉄棒をする脇で、橋本先生が補助をした。尻上がりや足かけ上がりは、ミツエにもできた。

「つぎは逆上がり」

ミツエは死にたくなかった。列からすこし横に出て、先に逆上がりをしている男子から何か参考になることを見つけようと、一人一人の逆上りをよく見た。逆上がりができる子は、なぜあんなに何でもないとのように、鉄棒に巻きついてしまえるのだろう、腕の力が強いのだろうか、蹴り上げ方が上手なのだろうか、と見ながら考えた。男子で一番痩せている高岡君は、巻きつけずに途中でほぐれてしまった。自分もあんなのだ、とミツエは思った。

男子が降り、女子で一番背の低いミツエの番になった。見たことも、考えたことも、もう何の役にも立たなかった。わかるのはただ、みんなが見ていることと、すぐ横に橋本先生がいることだけだった。ミツエは【III】のような気持で鉄棒をつかみ、足を振り上げた。先生が手で尻を支えてくれたが、足はストンと落ちてしまった。

「もう一息だ」

と先生は言ってくれたが、やっぱりだめだった、と恥ずかしさを感じながら、男子たちの横にしゃがんだ。でも、とミツエは、今感じたものを、もう一度思い出してみた。鉄棒をしながら感じた感じは、する前に思っていたのと、すこし違っていた。前に逆上がりをしたときは、鉄棒が遠い感じで、腕に力が入らず、体がばらばらになってしまいうような感じだった。でも今回は、そのときよりも、すこし鉄棒が自分の中心に近い感じで、体も前ほどばらばらではなかったような気がする。

女子も一とおりに逆上りを終えると、先生は時計を見て言った。

「今日は始業が遅れて、あまり時間がないが、あとの時間は逆上がりができない者のトクンをする。できた者はこっちに並んで、やはり逆上りをする。できなかった者、こっちに並べ」

男子で逆上がりができなかったのは高岡君一人、女子はミツエと、松原里美と、一番背の高い二谷カヨ子の三人だった。四人ではすぐに順番がまわってくる。先生は「つぎ」と言う以外、何も言わずに一人一人のお尻に手を添えた。何度目かに、思いがけず里美がくるりと鉄棒のまわりに巻きついた。

「できたじゃないか！」と先生が言った。

「できたー」

と里美が、眼をまん丸くし、口も大きくあけて、【Ⅳ】ように言った。むこうの列から仲良しの木崎富子が飛んできて、二人で手を取り合って「できた、できた」とピョンピョンはねた。

高岡君は途中で照れ臭そうに笑って、あきらめた顔になる。二谷カヨ子は鉛筆か割り箸のようにまっすぐな感じで、なかなか鉄棒に巻きつけない。ミツエは自分がどうなのかはわからなかった。三人とも逆上がりができないままに、終業の鐘が鳴った。

授業がぜんぶ終わると、ミツエは掃除当番の関のぼるに「鉄棒のところまで待ってる」と言って校庭へ走っていった。そしてランドセルを地面に置き、鉄棒をにぎった。さっきの体操の時間、もうすこし鉄棒をやっていたような気がしたのだ。そんなことは初めてだった。

ミツエが逆上がりの練習をしていると、大山澄子と根本千代がブランコのところに来てしゃがんだ。掃除当番の君塚照子と二谷カヨ子待っているらしい。

何度目か足を蹴り上げたとき、ミツエは今までとまったく違う感じがして、頭の中が真白になった。何が起こったのかわからなかったが、眼帯をはずしたときのように、自分のまわりが破裂したような感じがした。自分のまわりの空気にヒビが入って、空気が割れたような感じがしたのだった。その真ん中に自分がある。空がぐらぐら揺られて、大きな笑い声を出しているような気がした。

自分が笑っているのだ。自分は今、笑っている、と強く感じながら、ミツエは自分の中からこみ上げてくる笑いを声に出した。今まで笑ったことはなかった、という不思議な感じがした。

ミツエはもう一度、逆上がりをしてみた。やっぱりできた。そのことを、誰かに言いたかった。ブランコのところから、根本千代と大山澄子がこつちを見ていた。千代は口をぼかんとあけ、澄子は真剣な顔をしていた。ミツエは二人にむかって大声で、

「できたー」

と言った。すると、千代は澄子の方を見て、澄子は眼を伏せてしまった。

掃除当番が終った子たちが出てくるのが見えたので、ミツエは関のぼるに早く言おうと、校庭をスキップしながらそっちへ行った。君塚照子と二谷カヨ子が並んで歩いてきた。ミツエは二人をやり過ぎそうとした。すると、すれ違う一メートルほど手前のところで、君塚照子が突然、

【Ⅴ】ように何かを言った。

「おきー」

とミツエの耳には聞こえた。ミツエはびっくりして足を止めた。照子が何か話しかけてくるなんて思ってもいなかったが、照子は立ち止ま

り、眼に力をこめるようにしてこつちを見ていた。それを見てミツエは、たしかに照子は自分に「おき」と言ったのだとわかった。

「え、何？」

とミツエは聞き返した。「おき」という言葉の意味がわからないので、聞き違いかもしれないと思ったのだ。光るような眼でこつちを見たまま、君塚照子は黙っていた。あざ笑うような、突き刺すような眼だった。ミツエがもう一度聞き返そうとしたとき、照子は急に視線をそらして歩き出した。ミツエはわけがわからないまま、振り返って二人を見送った。

関のぼるやコッペがこつちにやって来た。ミツエは「おき」の意味を、今すぐ関のぼるたちに聞くことはできないような気がした。あざ笑うような眼から、「おき」というのがいい意味ではないらしいことは感じられた。

「逆上がり、できた」とミツエは言った。

「本当!? よかったなあ」

「見せてみな」

ミツエは鉄棒のところまでやって見せた。関のぼるたちは拍手をしたが、ミツエはもう、

| | | |
|---|---|---|
| F | と | G |
|---|---|---|

のようにピョンピョン跳ぶような気にはなれなかった。「おき」って何だろうと考えながら、関のぼるたちと一緒に帰った。

「おきって何だ？」

とミツエは、兄の良治に聞いてみた。

「知らねえ」と良治は言った。

向いのパーマ屋の久代にも聞いてみたが、久代も「知らねえ」と言った。

斉木先生は言葉の違いのことを言ったが、やっぱり「むこう」の子たちの言葉はすごく違うのかもしれない、それで「むこう」の子たちは「こつち」の子とあまり口をきかないのかもしれない、とミツエは思った。

(千刈あがた「野菊とバイエル」より)

【注】 ※1 ブルマー……女子が下半身に着用する運動着のこと。

問一 空欄【I】～【V】に入る言葉として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を二度以上選ばないこと。

- ア、自分の顔が赤くなつた イ、眼をつむる ウ、空に叫ぶ
エ、すずごく切りつける オ、重い息を吐きたい

問二 空欄 A D に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-----|------|---|------|---|------|---|------|
| ア、A | お前たち | B | お前たち | C | おれたち | D | 知り合い |
| イ、A | おれたち | B | お前たち | C | おれたち | D | 仲良し |
| ウ、A | お前たち | B | おれたち | C | お前たち | D | 知り合い |
| エ、A | おれたち | B | おれたち | C | お前たち | D | 仲良し |

問三 空欄 E に入るのに適切な内容を、本文中から十五字以上十八字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部①「一番苦手な体操の時間が橋本先生だなんて」、②「わかるのはただ、みんなが見ていることと、すぐ横に橋本先生がいただけだった」からは、ミツエの橋本先生に対するどのような気持ちがかかるか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、厳しい橋本先生に叱られるのがこわく、失敗を見せたくない気持ち。
イ、橋本先生に自分の格好の悪いところを見られたくないと思う気持ち。
ウ、橋本先生に自分の苦手科目を熱心に教えられても困るという気持ち。
エ、優しい橋本先生に自分もみんなのように甘えてみたいという気持ち。

問五 二重傍線部1「恥ずかしい」と、2「恥ずかしさ」との違いを説明したものととして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、1は他の人に対する自分の本心に気づいてうろたえてしまう気持ちで、2は自分の失敗に対する他の人の目を気にして感じている気持ちである。
イ、1は他の人の行いに対して恥ずべきだと思い、強くなじる気持ちで、2は自分の努力を人前で見せることでプライドが傷ついている気持ちである。
ウ、1は自分に関係のある人の行いに気後れして感じる気持ちで、2は自分の努力を人前で見せることでプライドが傷ついている気持ちである。
エ、1は自分に関係のある人の行いがその場にふさわしくないと感じる気持ちで、2は自分の失敗を他の人に見られることについての気持ちである。

問六 傍線部③「もうすこし鉄棒をやっていたような気がしたのだ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、努力していることを橋本先生に知ってほしいから。
イ、「モト村」の女の子たちには負けたくなかったから。
ウ、みんなの前で恥をかくのは、もうこりこりだから。
エ、逆上がりのコツをつかみかけた気がしていたから。

問七 傍線部④「今まで笑ったことはなかった、という不思議な感じがした」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、このように喜びを全身で感じて自然に笑ってしまう体験は初めてだということ。
- イ、このように周りの友だちに喜びを伝えたいと強く思うのは初めてだということ。
- ウ、今まで鉄棒が不得意なことで知らず知らず暗くなってしまっていたということ。
- エ、今まで「モト村」の子とのぎくしゃくした関係の中で緊張きんちょうしていたということ。

問八 傍線部⑤の「おき」という言葉には「えこひいき」という意味が込められている。その場合、「おき」という言葉の由来と考えられるものとして最も適切な語を次から選び、記号で答えなさい。

- ア、お気楽
- イ、お気軽
- ウ、お気の毒
- エ、お気に入り

問九 傍線部⑥「ミツエはもう、 と のようにピョンピョン跳ぶような気にはなれなかった」について、以下の(1)と(2)の問いに答えなさい。

(1) 空欄 F ・ G に入れるのに最も適切な登場人物二人の名前を次から選び、記号で答えなさい。ただし、順番は問わないこととする。

- ア、二谷カヨ子
- イ、君塚照子
- ウ、松原里美
- エ、根本千代
- オ、関のぼる
- カ、木崎富子
- キ、大山澄子

(2) このような気持ちになった理由を説明した次の文の空欄 に入れるのに適切な漢字一字を答えなさい。

「逆上がりができるようになった喜びに、照子が言った言葉が を差したから。」

